

## 聴覚障害幼児の母—子コミュニケーションに関する語用論的アプローチ —両親聾の場合を中心に—

中野 聡子\*・吉野 公喜\*\*・伊藤 泉\*\*\*

本研究は、健聴の両親を持つ聾児とは異なった問題を持ちながらも、研究対象となることの少ない、聾の両親を持つ3歳の聴覚障害児の母—子相互作用をビデオに記録し、相互作用水準、言語機能、コミュニケーション・モードの観点から健聴の両親を持つ聾児の母子相互作用と比較し検討を加えた。

その結果、両親が聾である聴覚障害児の母—子コミュニケーションでは、非言語的モードを多く用い、スピーチとの併用が全体にわたってみられるなどの違いがみられた。そして、聴覚障害児の母—子相互作用の成立要因として、子ども主導型のコミュニケーションを行いつつも、母親が子どもの言語行動に対して拡充を行っていくこと、非言語的モードを効果的に用いるなど、コミュニケーション・モードを併用させること、母親が子どもの障害特性をよくとらえ、それに応じた対応をすることが確認された。

キー・ワード：聴覚障害児 母—子相互作用 両親聾 語用論

### I. はじめに

近年、言語発達研究では、語用論の台頭により言語獲得が社会的行為であり、人との相互作用過程で行われるものであるとの見方が有力となってきている。

聴覚障害幼児の言語能力やコミュニケーション能力の向上に母—子コミュニケーションのあり方が深くかかわってくるという見解は誰しもが認めるところであろう。清水・八木は、聴覚障害幼児の母—子相互交渉のビデオ記録をもとに、母親の発話(1975<sup>7)</sup>)、子どもの「言語的」発話(1976 a<sup>8)</sup>)、子どもの発話の表現様式(1976 b<sup>9)</sup>)、子どもの発話の機能(1977<sup>10)</sup>)について分析を行っている。しかし、これらの分析は、音声言語の発達を中心としており、また、言語資

料の分析は規範文法に沿っている点にとどまっている。

両親が聾である場合と健聴である場合においては、母—子コミュニケーションのあり方は果たして同じものであろうか。

わが国では、冷水(1981<sup>6)</sup>)が、両親が聾である手話併用の聴覚障害幼児(以下、手話幼児とする)と両親が健聴である口話のみの聴覚障害幼児(以下、口話幼児とする)の母—子相互交渉を分析し、表面的な文構造においては手話幼児が優れているとは言えなかったが、語用論的には、口話幼児よりも手話幼児の方が優れていたと述べている。

また、幼児期から手話でコミュニケーションを行っている両親聾の聴覚障害児の方が口話のみで教育された、健聴の両親を持つ聴覚障害児よりも、言語、学業成績、社会性などが優れているという、Schlesinger and Meadow(1972<sup>9)</sup>)、Vernon and Koh(1970<sup>11)</sup>)による

\*筑波大学心身障害学研究科

\*\*筑波大学心身障害学系

\*\*\*難聴幼児通園施設みやこ園

報告もある。

もちろん、手話の言語学的な研究が十分になされていない上、音声言語への移行などの問題が解決されていない現在、聴覚障害幼児の教育の場に、手話が取り入れられることには慎重であるべきだが、一方で、身ぶりや指さし、手話などというコミュニケーション・モードに中心的な役割をもたせつつ、効果的なコミュニケーションを行っている聴覚障害児に対して、音声言語の発達のみを中心とした分析方法をあてはめては、聴覚障害児のコミュニケーション行動を十分にとらえることはできないであろう。

それ故、両親聾の聴覚障害児の母一子相互交渉における母一子言語関係、言語機能やコミュニケーション・モードについて総体的に分析・検討することで、両親聾のケースに対するアプローチや援助に有益な示唆を与えることができると考える。また、両親聾の聴覚障害児の母一子コミュニケーションを詳しく分析することで、健聴の両親を持つ聴覚障害児をも含めた聴覚障害児の言語発達の問題に今までになかった視点を生み出すこともできよう。

以上のような背景をふまえ、本研究では、両親聾の聴覚障害児の母一子相互交渉を中心に健聴両親の聴覚障害児との比較を交えながら、語用論的な観点から分析し、言語発達の重要な要因となる母一子コミュニケーションのあり方を探ることを目的とする。

## II. 方法

### 1. 対象児

- (1) O. E. : 3歳6カ月。女兒。両親とも先天性聾である。平均聴力レベルは右 103 dBHTL、左 93 dBHTL。語音明瞭度(最高受聴明瞭度)は、67式語表でスピーカからの聴取により 80 dB SPL で 25%。補聴器 (Oticon E38P) を両耳に装用。知的能力に問題は認められない。家族構成は、父、母、祖父(健聴)、祖母(健聴)。
- (2) T. M. : 3歳11カ月。女兒。両親とも健聴

である。平均聴力レベルは、右 108 dBHTL、左 108 dBHTL。語音明瞭度(最高受聴明瞭度)は、67式語表でスピーカからの聴取により 80 dB SPL で 25%。補聴器 (Oticon E39PL) を両耳に装用。知的能力に問題は認められない。家族構成は、父、母、祖父、祖母、妹(本人以外は健聴)。

### 2. 手続き

O. E. と T. M. が週 2 回来園して指導を受けている難聴幼児園施設 M 園のプレイルームにおいて、母一子相互交渉場面を母子の入室直後からそれぞれ 30 分間ずつ 2 台のビデオカメラ (SONY、CCD-TR 900) に記録した。プレイルームには、ままごとセットなど、子どもが興味を示しそうなものを用意し、非統制場面とした。母親には、子どもと自由に遊んでもらうように教示した。

なお、ビデオカメラは、通常の指導時に、指導記録を収集する目的などで使用されることが多いため、対象児は、ビデオ記録に十分慣れていると思われる。

### 3. 分析方法

母一子相互交渉場面を 30 分間記録したもののの中から比較的活発に相互交渉が行われている部分を、それぞれのケースについて 10 分間ずつ抽出し、トランスクリプトを作成した。トランスクリプトの作成には、実験者の他、2 名の健聴者(手話に熟達した者)が行った。これをもとに言語行動によって規定される分析単位 AU (Action Unit) と文脈により規定される IU (Interaction Unit) を設定した。Fig. 1 にトランスクリプト、AU、IU の具体例を示す。

これにより、以下の観点から分析を行った。

- (1) 石井・竹田・里見 (1989<sup>4)</sup>) の相互作用に関する水準設定に基づき、相互作用の開始者を母親および子どもに分け、それぞれの AU について伝達意図の有無によって区分し、IU の連鎖の長さにより Table 1 のような水準を設定した。
- (2) 母一子コミュニケーションのそれぞれの相互作用の水準について、後藤 (1976<sup>5)</sup>) による

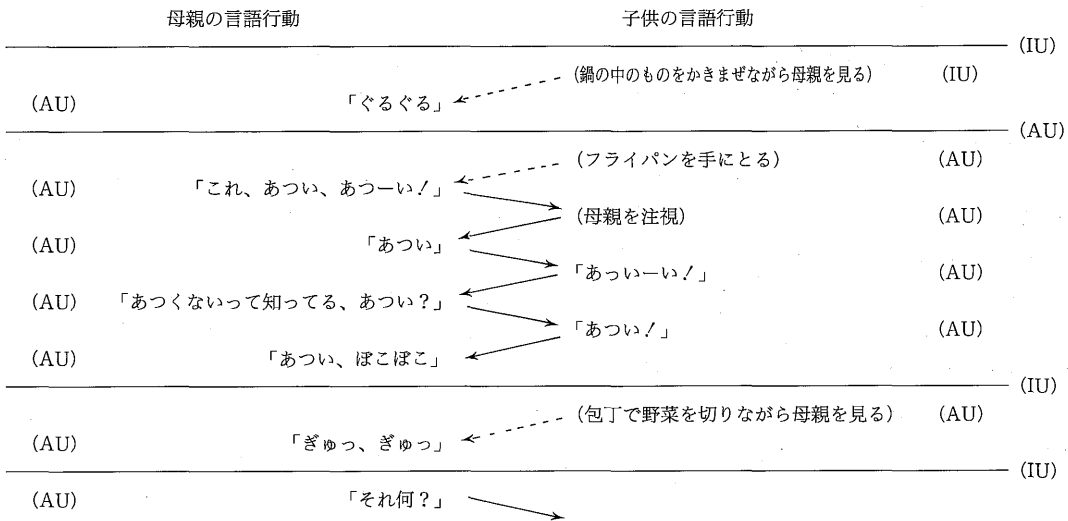


Fig. 1 トランスクリプト、AU、IUの具体例

Table 1 相互作用の水準設定

			母親の開始	子供の開始	備考 (機能)
A	相互作用不成立状態	1	M-----	C-----	平行
		2	M——	C——	無視
B	相互作用しかけの状態	1	M---->C	C---->M	意図的反応
		2	M—>C	C—>M	伝達意図的開始の反応
C	相互作用成立状態	1	M---->C—>M	C---->M—>C	みかけ開始で生起の連鎖
		2	M—>C—>M	C—>M—>C	伝達意図的開始で生起の連鎖

言語関係カテゴリー表、Dore (1975<sup>2)</sup>) の言語機能を参考にして、言語機能の面から 11 のカテゴリーを設定して分析を行った。

(3) 対象児と母親のそれぞれにおいて使用されたコミュニケーション・モードについて、9つのカテゴリーを設定した。また、それらのコミュニケーション・モードが言語行動 (Linguistic Behavior、以下 L とする) であるか、非言語行動 (Non-Linguistic Behavior、以下 NL とする) であるかについて、Fig. 2 のような分類を行った。

手話と身ぶりの区別については、一般に手話は身ぶり (ジェスチャー) と比較して再現性があり、定型的であり、手の動き、形が社会的に

決まっているものと定義されている。しかし、幼児の場合は、母—子間のコミュニケーションが生活の中でかなりの割合を占めていることから、本研究では、社会的に取り決められているもの (標準語の類) に加えて、母—子間でも再現性のあるもの、定型的であるものを手話と操作的に定義し、身ぶりは写像する場面で形が変わるものと規定した。

#### 4. 分析結果の信頼性について

実験者と他 1 名により一致度を各分析内容ごとに算定した。その結果、AU の区切り：94.9%、IU の区切り：81.3%、相互作用の水準：98.7%、言語機能カテゴリーの分類：89.4%、手段カテゴリーの分類：87.8% の一致

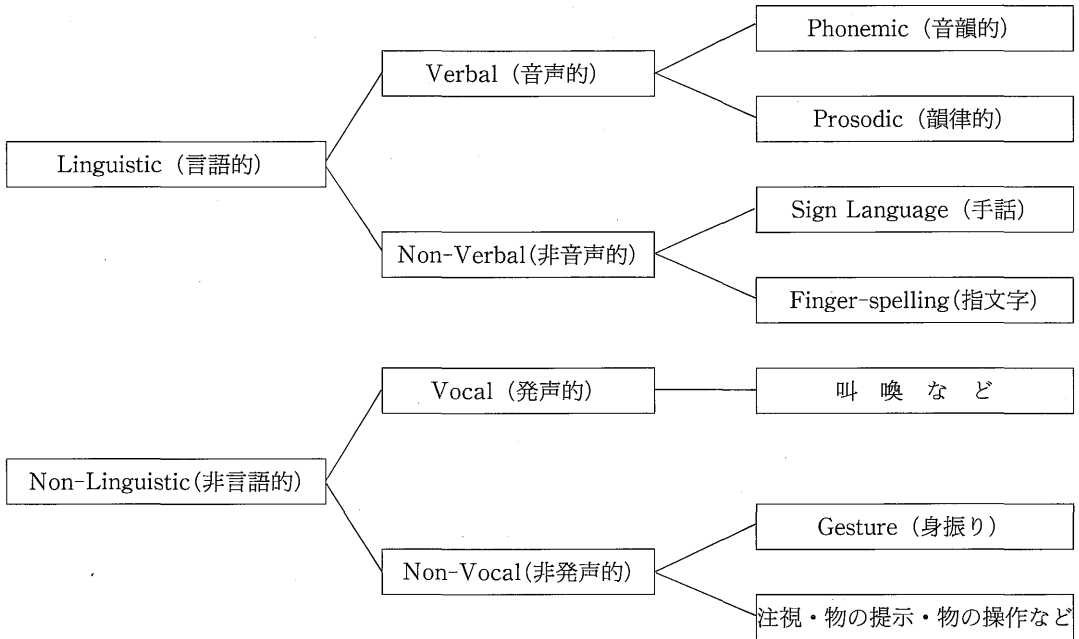


Fig. 2 N、NLの分類

度をみたので、2者の判断がほぼ一致するものとして分析を行った。

### III. 結果および考察

#### 1. 相互作用水準

全IUに占める子どもの開始の占有率は、両児とも母親開始の占有率よりも高く、子どもがイニシアチブをとっていることが明らかになった (Fig. 3)。相互作用水準の割合については、O. E. の方が相互作用成立度が高く、単位あたりのIUも長かった (Fig. 4)。しかし、両児とも伝達意図のない開始が多く、これに母親が意図を持ってかわることでコミュニケーションが展開されていることが明らかになった。

言語の前提の形成過程は、解釈してくれる大人の存在によって可能になる (Bruner, 1975<sup>1)</sup>)。このことから、コミュニケーションの開始においては、どちらの母親も望ましい関わり方をしていると言えるであろう。

#### 2. 言語機能

言語機能を各カテゴリー別に分類した結果を Table 2 に示す。

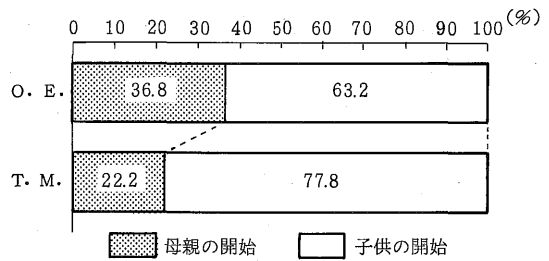


Fig. 3 全IUに占める母親の開始、子ども開始の割合

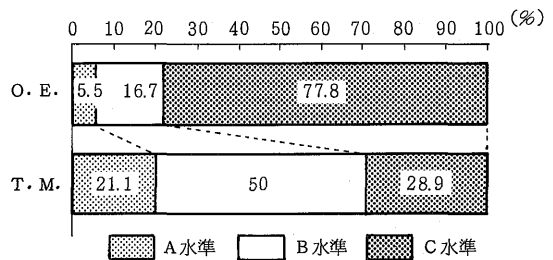


Fig. 4 相互作用水準の割合

子ども間の比較では、O. E. の方に自発的なカテゴリーがやや多く見られたが、「要求」カテゴリー

Table 2 言語機能の分類結果

カテゴリー	O. E.		T. M.		
	母 親	子 ども	母 親	子 ども	
要 求	15( 19.2)	14( 23.0)	15( 24.6)	1( 4.3)	
呼びかけ	4( 5.1)	0( 0.0)	2( 3.3)	1( 4.3)	
報 告	17( 21.8)	5( 8.2)	5( 8.2)	4( 17.4)	
質 問	12( 15.4)	0( 0.0)	18( 29.5)	0( 0.0)	
教 示	5( 6.4)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	
応 答	反復・模倣	3( 3.9)	4( 6.5)	0( 0.0)	1( 4.3)
	返事(closed-ended)	0( 0.0)	5( 8.2)	0( 0.0)	6( 26.2)
	説明(open-ended)	0( 0.0)	7( 11.5)	0( 0.0)	0( 0.0)
	受容・承認	18( 23.1)	15( 24.6)	21( 34.4)	6( 26.2)
	拒否	4( 5.1)	6( 9.8)	0( 0.0)	3( 13.0)
その他	0( 0.0)	5( 8.2)	0(0.0)	1( 4.3)	
計	78(100.0)	61(100.0)	61(100.0)	23(100.0)	

( ) 内は%

リを除けば、両児とも「応答」カテゴリーに占める割合が大きかった。これは、両児の母親が「要求」「質問」などの指示的なカテゴリーにおいて大きな割合を占めていることと対照的になっている。すなわち、内容的には母親主導型のコミュニケーションとなっており、T. M. で特にその傾向が強かったと言える。しかし、清水ら(1975<sup>7)</sup>が報告しているように、子どもが正しく答えるまで何度も同じ質問をくり返して、子どもの自由な表現を完全に無視するというようなものではなく、子どもがそのことばを知っているかどうかを確認し、子供の持つ言葉を強化する意図を含んでいるものが多かった。

また、母親の「質問」と子どもの「応答」の下位カテゴリーの関係から、O. E.の方がレベルの高いコミュニケーションを行っていることが明らかになった。

### 3. コミュニケーション・モード

#### 1) 受・発信の手段

両親の母親に共通していたのは、「発声・発語」の占める割合がもっとも高かったということである。Fig. 2の分類に従って、手段のカテゴリーを言語的(L)なものとは非言語的(NL)なものに分類すると、その分布比L:NLは、O. E.の

母親では1.4:1、T. M.の母親では、2.2:1となっている。どちらの母親も言語的なモードをより多く用いているが、T. M.の母親にその傾向が顕著であった。これに対して、子どもについては、分布比がO. E.では1:2.8、T. M.では1:4.5となっており、ともに非言語的なカテゴリーの割合が高く、特にT. M.に多く見られた。T. M.がもっともよく用いた手段は、うなづきや首を振るものであったが、これは、母親の質問がT. M.にclosed-endedを求めるような性質のものであったためと思われる。O. E.の場合、非言語的カテゴリーの中では、「物の操作」がもっとも多かった。これに次いで、O. E.の母親と同様、身ぶりも多く用いていることが認められた。

#### 2) コミュニケーション・モードの併用

相互作用の水準において、言語関係が完全には成立したC水準と言語関係が完全には成立しなかったA・B水準について、それぞれの水準のAUで用いられた伝達手段を単独で使用されたのか、いくつかの手段を併用したのかを分類した(Fig. 5, Fig. 6)。

この結果、母親は、「発声・発語」などの単独使用で伝達するよりもいくつかのコミュニケー

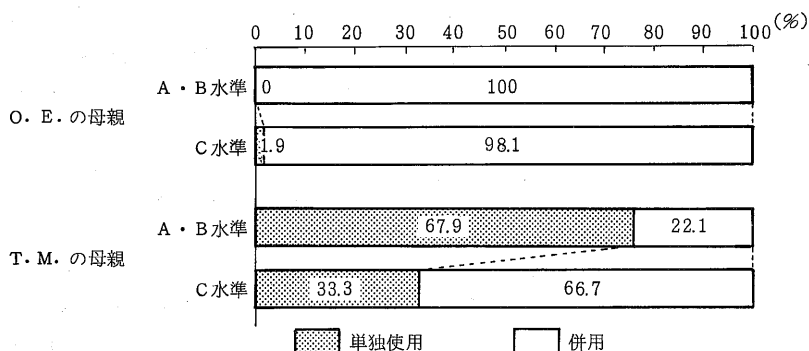


Fig. 5 O. E. と T. M. の母親におけるコミュニケーション・モードの併用

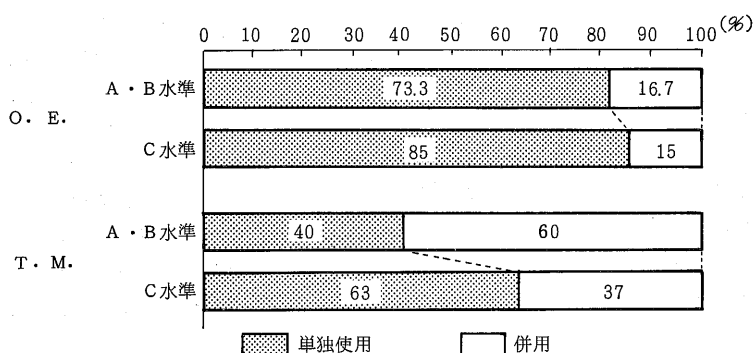


Fig. 6 O. E. と T. M. におけるコミュニケーション・モードの併用

ション・モードを併用した方が子どもの反応が良いことがわかる。また、O. E. の母親は、スピーチと非音声モードを同時的に用いているのに対し、T. M. の母親は、スピーチが中心で非音声モードは補助的に用いていた。O. E. は、母子ともに T. M. に比べ、非言語的モードを多く使い、スピーチとの併用が全体にわたってみられた。

コミュニケーション・モードの併用は、子どもにとって理解しやすいだけでなく、母親が子どものことばを理解するためにも重要なことであると思われる。特に、聴覚障害を持つ O. E. の母親では、子どもがスピーチのみで応答したため、母親に伝わらなかった場合もみられた。

子どもにおいて、単独使用の占める割合が大きかったことについては、そのほとんどが非言語的モードであることから、単独使用でも十分

にコミュニケーションができたというよりは、むしろ母親からの働きかけに非言語モードだけで答えられるレベルのものが多かったからであると思われる。

今後、子どものコミュニケーション行動が発達し、より複雑で高度なコミュニケーションが展開されること、また、社会性の発達には幼児期の母-子コミュニケーションが大切であることを考えると、子どもの言語発達のみを目を向けるのではなく、母親と子どもの両者とも制約のない自由なコミュニケーションが可能な方法・環境を探索していくことが、結局は子どもの言語発達にもつながってゆくと思われる。

#### IV. まとめ

聴覚障害幼児のコミュニケーションの実際について以下のような知見が得られた。

- (1) 子どもが非言語的モードを用いた不十分な伝達であっても、母親はこれを意図のある行動としてとらえ、スピーチとともに手話や非言語的モードである身ぶりなどを用いつつ子どもの言語行動に対して拡充を行う傾向にある。
- (2) 聴力レベルが重度の聴覚障害児は、他の行動をしながら言葉かけに応じることは困難であり、母親はこのことをよく熟知して働きかける必要がある。
- (3) 両親が聾の場合、スピーチのみのコミュニケーションでは、子どもの言語行動をうまくつかめないことがある。子どもの言語発達を考えるとともに聾の親のニーズに合ったアプローチと援助が必要となる。

#### 文 献

- 1) Bruner, J. (1975): The ontogenesis of speech acts. *Journal of Child Language*, 2, 1-19.
- 2) Dore, J. (1975): Holophrases, speech, acts, and language universals. *Journal of Child Language*, 2, 21-40.
- 3) 後藤 守 (1976): 母子言語関係の成立過程に関する研究 (I)—ダウン症候群の幼児と母親の言語関係の分析を中心として—。北海道教育大学紀要 (第一部 c), 26 (2), 9-21.
- 4) 石井喜代香・竹田契一・里見恵子 (1989): ことばに遅れのある障害幼児に対する INREAL アプローチ (I)—コミュニケー

ション成立にかかわる大人の役割—。大阪教育大学障害児教育研究紀要, 12.

- 5) Shclesinger, H. S. and Meadow, K. P. (1972): *Sound and sign: Childhood deafness and mental health*. Berkeley: University of California Press.
- 6) 冷水来生 (1981): 手話を併用するろう幼児と口話のみのろう幼児の母子相互交渉の語用論的分析。特殊教育学研究, 19 (1), 1-9.
- 7) 清水美智子・八木由美子 (1975): 家庭場面でのろう幼児の母子対話の実態に関する研究 (I)—母親の発話からの分析と考察—。ろう教育科学, 17 (2), 53-82.
- 8) 清水美智子・八木由美子 (1976a): 家庭場面でのろう幼児の母子対話の実態に関する研究 (II)—子どもの発話の表現形式を中心に—。ろう教育科学, 18 (1), 5-22.
- 9) 清水美智子・八木由美子 (1976b): 家庭場面でのろう幼児の母子対話の実態に関する研究 (III)—子ども発話の諸機能を中心に—。ろう教育科学, 18 (3), 101-103.
- 10) 清水美智子・八木由美子 (1977): 家庭場面でのろう幼児の母子対話の実態に関する研究 (IV)—子どもの「言語的」発話の分析—。ろう教育科学, 19 (1), 5-38.
- 11) Vernon, M. and Koh, S. (1970): Early manual communication and deaf children's achievement. *American Annals of the Deaf*, 115, 527-563.

**Pragmatical approach on mother-child interaction in  
preschool children with hearing impairments.**

**Satoko NAKANO, Tomoyoshi YOSHINO and Izumi ITOU**

The purpose of this study was to investigate and describe the origin of mother-child interaction in hearing-impaired children. Videotaped samples of interaction were collected from two hearing-impaired children. They were three years old. One of them has deaf parents and the other has hearing parents. Interaction were analyzed from three points of view : 1) interaction level, 2) linguistic function, 3) communication mode.

The results showed that in the interaction of hearing-impaired child with deaf parents, they frequently used non-linguistic mode accompanying with speech. The origin of mother-child interaction were speech. The origin of mother-child interaction were as follows :

- 1) child-initiated communication
- 2) promoting children's utterance by mother
- 3) using non-linguistic mode accompanying with speech
- 4) understanding features of the hearing-impaired

**Key Words :** hearing-impaired children, mother-child interaction, hearing-impaired children with deaf parents, pragmatics